

あったことなかったとか、神さまほどよいものはない

昔むかし、あるところに、お母さんがいて、三人の息子とひとりの娘がありました。

お母さんは、息子たちが大きくなると、畑仕事に行くようにしていました。畑はたいそう遠いところにありました。お母さんは、息子たちに玉ねぎとにんにくをわたしていました。

「道のとちゅうで、たまねぎの皮を捨ててるんだよ。その皮を目当てにして、妹におべんとうを持って行かせるからね」

息子たちは出かけました。歩きながらずっと、たまねぎとにんにくの皮をむいては、道に投げ捨てていきました。

この道のとちゅうに、百の頭を持った怪物、デフがすんでいました。あるとき、デフの母親が、道にずっと、たまねぎの皮がまいてあるのに気づきました。そこで、その皮をぜんぶ拾い集めて、デフの家に行く道にまきました。

三日たちました。お母さんは、息子たちはもう食べ物でぜんぶ食べてしまっただろうと思って、娘にべんとうを持って行かせることにしました。

娘は、地面を見ながら、玉ねぎとにんにくの皮をつたって歩いて行きました。どんどん歩いて行くと、一軒の家がありました。家の中に、おばあさんがひとりすわっていました。娘は、

「おばあさん、あらゆる聖者の名においてうかがいますが、ここでわたしの兄さんたちが働いていませんか」とききました。おばあさんは、

「ここには、百あたまのデフがいるだけだよ。でも入っておいで。かくしてやろう。デフが帰って来て見つけたら、おまえは食べられてしまうよ」といいました。

娘がかくれるとすぐ、デフが帰って来ました。デフは、たきぎとけものを肩から投げ出すと、おばあさんにいました。

「人間のにおいがする。母さん、いったいだれが来たんだい」

「だれも来ないよ。ここでは、空の鳥も飛ばないし、地面のありもはいまわらないじゃないか。みんなおまえを怖がってるんだよ」

ところが、デフはだまされません。おばあさんはとうとう白状してしまいました。

「娘をひとりかくまってやったんだ。おまえの女房にようぼうにしたらいいだろう。その子を食べないと約束やくそくしな。出して来て見せてやるから」

デフは、娘を見るとすっかり気に入って、女房にしました。

いつぼう、三人の兄さんたちは、妹が来るのを待ちまちに待っていました。とうとうがまんできなくなつて、うちに帰つて来ました。

「お母さん、どうして妹におべんとうを持ってこさせなかったの」

お母さんは、これを聞いてはげしく泣なきだしました。

「あの道には百あたまのデフがすんでるんだ。きつとあいつに食べられたにちがいない」
兄さんたちは、すぐに立ち上がつて、娘を救すくい出しに出かけました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしか歩かなかったのだろうか。しまいにデフの家に着きました。家の屋根やねに、娘とおばあさんが立っていました。おばあさんが、

「ねえ、ちよつと向むこうを見てごらん。何か見えないかい」といいました。娘は、

「遠くのほうに、何か見えるわ。はえぐらいの大きさのものが」といいました。

「そいつらの母親はかわいそうだ。わたしの息子の母親はかわいそうだ」と、おばあさんはいいました。

すこしすると、おばあさんはいいました。

「もういちど見てごらん。そいつらはここへ来るんじゃないだろう？」

「三人がこつちへ向かつて来るわ」

「そいつらの母親はかわいそうだ。わたしの息子の母親はかわいそうだ」

兄弟は、デフの家に近づいて来ました。娘は、兄さんたちだと分かつて、迎むかえに飛とび出していつて、だきつきました。おばあさんは、兄弟を家に入れて食べ物をくれました。そして、

「息子が帰つて来てあんなたちを見つけたら、食べられてしまうからね」といつてかくしてくれました。

そこへ、デフが帰つて来ました。デフは、たきぎとえものを肩から投げ出すと、おばあさんにいいました。

「人間のにおいがするぞ。母さんは、まただれかくしているな」

「おまえの女房の兄弟が来たんだよ。あの人たちをとつて食わないと約束するなら、見せてあげるよ」

デフが約束したので、おばあさんは、三人の兄弟を連れて来ました。

デフは兄弟たちに、

「さあ、食べ物の用意をしよう」といいました。そして、みんなでえものを料理し始めました。三人が一頭のシカの皮をはいでいるうちに、デフは二十頭のシカを三度も皮をはいで細かく切つてなべに投げこみました。

料理ができると、デフは兄弟たちに、

「おまえたち、肉を食べるか、骨を食べるか」とききました。兄弟は、

「ぼくらは骨で十分だよ」といいました。そこで、デフは肉を食べ、兄弟には骨を投げてやりました。

デフは、

「おまえたち、ワインをかめから飲むか、つのから飲むか」とききました。

「ぼくらは、つので十分だよ」

そこで、デフはかめからワインを飲み、兄弟は、つのでちびちび飲みました。

ご飯が終わると、デフは、

「おまえたち、ベッドで寝るか、家畜小屋で寝るか」とききました。

「ぼくらは、家畜小屋で十分だよ」

そこで、デフはベッドに横になり、兄弟は家畜小屋に行つて寝ました。

つぎの朝、デフは、家畜小屋に行つて、兄弟のひとりを飲みこみ、あとのふたりを腕の下に抱えて、森へ出かけて行きました。

さて、兄弟たちのお母さんは、待ちに待ちましたが、三人とも帰って来ません。お母さんは、泣きつづけ、泣き声は天までとどきました。そこへ、ひとりの男が通りかかりました。

「なぜ、そんなに悲しんでいるのかね」と男はたずねました。お母さんが、子どもたちをみんなデフにとられてしまったことを話すと、男は、りんごをひとつくれていいました。

「このりんごをうすく百枚に切りなさい。そして、毎日、そのりんごのうす切りを三枚ずつ食べなさい。百枚ぜんぶ食べ終わったら、おまえは男の子を生むだろう。そうしたら、その子をりんごのうす切りと名づけてやるんだ」

お母さんは、そのとおりにしました。もらったりんごを百枚のうす切りにして、毎日

三枚ずつ食べました。ぜんぶ食べ終わったとき、お母さんは身みごもり、男の子を生みました。そして、その子をりんごのうす切りと名づけました。

りんごのうす切りは、日に日に大きくなりました。あるとき、近所のおばあさんから、自分には兄さんたちと姉さんがいたことを聞きました。そこで、お母さんにどういふことかとたずねました。お母さんは、はじめは話そうとしましたが、りんごのうす切りがあきらめないのです、とうとういいました。

「おまえの三人の兄さんとその妹は、デフにさらわれてしまったんだよ」

りんごのうす切りは、

「ぼくが助けに行く」といいました。お母さんは、ひきとめましたが、どんなにたのんでも耳をかせませんでした。

りんごのうす切りは、出かけて行きました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしか歩かなかったのだろうか。しまいに、お百姓たちが畑をたがやしているところにやって来ました。りんごのうす切りは、

「おうい、おうい、逃げろ。百あたまのデフが来たぞう」とさけびました。百姓たちは、鋤すきを投げだして、逃げて行きました。

りんごのうす切りは、畑に入っていくって、その鋤をぜんぶ背せなか中にかついで、鍛冶屋かじやに持っていくきました。

「この鉄で、弓と矢とくつを一足作ってくれ」

鍛冶屋が注文ちゅうもんどおり作ってくれたので、りんごのうす切りは、その鉄のくつをはき、鉄の弓と矢を持って、百あたまのデフをさがしに出かけました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしか歩かなかったのだろうか。しまいに、デフの家に着きました。屋根の上に、娘とおばあさんが立っていました。おばあさんが、

「ねえ、ちよつと向こうを見てごらん。何か見えないかい」といいました。娘は、

「遠くのほうに、何か見えるわ。はえぐらいの大きさのものが」といいました。

「そいつらの母親はかわいそうだ。わたしの息子の母親はかわいそうだ」と、おばあさんはいいました。

りんごのうす切りは、どんどん近づいていって、まっすぐ家の中に入っていました。

そして、娘を見ると、まちがはなく自分の姉さんだと思いました。

「ぼくは、あなたの弟だ」といって、これまでのことを話しました。娘は大よろこびし

ました。おばあさんが、

「おいで、ぼうや。息子が帰って来てあんたを見つけたら、食べられてしまうからね」といいましたが、りんごのうす切りは、

「おまえなんか行っちまえ」といつて、おばあさんを追いはらってしまいました。

そこへ、デフが帰って来ました。デフは、何本ものたきぎと山ほどのえものをついでいました。すると、家の周りを若い男が散歩しているのが見えました。

「ここでは、空の鳥も飛ばないし、地面のありもはいまわらない。みんなおれを恐れているからだ。それなのに、ああやってうろろ散歩しているとは、いったいだれだ」

デフは怒り狂いました。目からは火花が飛び散りました。とんで行ってどなりつけました。

「きさまは何者だ。何をしにやってきた」

「おれは、おまえの女房の弟だ。おまえの客だぞ。おれを泊めろ」と、りんごのうす切りはいいました。デフは、

「よろしい。では昼飯の用意をしよう」といいました。ところが、デフが一頭のシカの皮をはいでいるうちに、りんごのうす切りは、全部のシカの皮をはいで細かく切つてなべに投げこみました。デフはうめきました。

料理ができると、デフはりんごのうす切りに、

「おまえは、肉を食べるか、骨を食べるか」とききました。りんごのうす切りは、

「おれには肉をくれ。おれを骨をしゃぶる犬だと思ってるのか」とさげびました。

デフは、

「おまえは、ワインをかめから飲むか、つのから飲むか」とききました。

「ワインはかめからくれ。つのなんかで飲めるもんか」

デフはすっかり気が重くなりました。

ご飯が終わると、デフは、

「おまえは、ベッドで寝るか、家畜小屋で寝るか」とききました。

「なんで家畜小屋なんだ。ベッドを用意しろ」

そこで、りんごのうす切りはベッドに横になり、デフは家畜小屋に行つて寝ました。

デフは、横になりましたが、眠れません。どうやってあの客をかたづけようかと考えたあげく、立ち上がつて、壁から大きな刀をとつて、とぎはじめました。

りんごのうす切りは、そっと起き上がって、ベッドに木の切り株かぶを寝かせてふとんをかけました。それから戸のかげにかくれました。

夜中になると、デフは、ダイヤモンドのようにとぎあげた刀を持って、家に入ってきました。そして、ベッドの上から刀を打ちおろしました。切り株は木この端はみじんになりましたが、デフは気づきませんでした。デフが部屋から出て行くと、りんごのうす切りはベッドにもどってぐっすり眠りました。

つぎの朝、デフはおどろいてりんごのうす切りにききました。

「夜中に何か起らなかったか」

「いや」

「のみにかまらなかったか」

「いや」

「それなら、かかって来い」

それを合図あいずにふたりは取っ組み合いをはじめました。デフはなぐりかかりましたが、りんごのうす切りはびくともしません。今度はりんごのうす切りがデフを持ち上げて地面にたたきこみました。そして、矢をつがえていました。

「おれの兄弟をどこにやったかいえ。さもないとこの矢が飛んでいくぞ」

デフは、おどろいていました。

「わしは、腹はらの中に小さな箱はこと布ぬのを一枚持っている。その箱の中におまえの三人の兄弟が入っているのだ。布でさわると兄弟は生き返る」

りんごのうす切りは、デフの腹をさいて小箱と布を取り出しました。そして、小箱の中から兄さんたちを救すくい出し、布でさわると生き返りました。りんごのうす切りは、自分が弟であることを話して、みんなでいっしょに家に向かいました。

とちゅうで、三人の兄さんは、りんごのうす切りが眠っているあいだに、うす切りを木にかたくしばりつけてしまいました。妹はやめてくれと泣いてたのみましたが、兄さんたちは耳をかせませんでした。

りんごのうす切りは、目をさますと、木にしばりつけられているのに気がつききました。引っぱっても身動きできません。りんごのうす切りは、神さまにお祈いのりしました。

「神さま、もしわたしが兄さんたちに対して罪つみがあるならば、このままわたしを殺ころしてください。けれども、もし兄さんたちがわたしに対して罪があるならば、どうぞわたし

に力をあたえて、この木を根っこごと引きぬかせてください」

りんごのうす切りは、こういったかと思うと、その木を根っこごと土の中から引きぬきました。そして、その木を肩にかついだまま家に帰りました。家につくと、

「すぐに出て来てぼくの縄をほどこしてくれ」とさげびました。兄さんたちは、まっさおになって、床にぶっ倒れそうになりましたが、あわててかけよって、弟の縄をほどこいてやりました。

りんごのうす切りは、兄さんたちに仕返しをしませんでした。そして、家を出て行くことにしました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしか歩かなかったのだろうか。やがて、りんごのうす切りは、ある畑にやってきました。そこでひとりの男が、畑をたがやしながら、土くれをとっては口の中に入れて飲みこんでいました。りんごのうす切りはそれを見て、

「おじさん、どうして土くれを飲みこんでるんだい」とききました。男は、

「りんごのうす切りが、あの百あたまのデフをやったんだぞ。それなのに、おれが土くれを飲むといっておどろくのかい」といいました。りんごのうす切りは、

「それじゃ、ぼくらは兄弟になろうじゃないか」といって、ふたりは兄弟の誓いを立てました。それから、いっしょに歩き出しました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしか歩かなかったのだろうか。ふたりは、また別の畑にやってきました。そこでひとりの男が、両足にそれぞれ石臼をしばりつけ、上着の下に二羽のうさぎを抱いていました。男は、二羽のうさぎを放しては追いかけて行つてつかまえていました。りんごのうす切りはそれを見て、

「おじさん、どうしてうさぎをつかまえることができるんだい」とききました。男は、

「りんごのうす切りが、あの百あたまのデフをやったんだぞ。それなのに、おれが二羽のうさぎをつかまえるといっておどろくのかい」といいました。土くれを食う男が、

「ここにそのりんごのうす切りがいるんだぞ」といいました。りんごのうす切りは、

「それじゃ、ぼくらは兄弟になろうじゃないか」といいました。三人は兄弟の誓いを立てました。それから、いっしょに歩き出しました。

三人は、矢を放って、矢が落ちた所でご飯を食べることにしました。はじめに土くれを食う男が矢を放ちました。あまりいい場所ではありませんでしたが、三人はそこで昼ご飯を食べました。それからまた、うさぎをつかまえる男が矢を放ちました。やはりあ

まりいい場所ではありませんでしたが、そこで晩ご飯を食べました。

こんどは、りんごのうす切りが、矢を放ちました。矢は、飛んで行って、三人暮らしのデフの家の食器戸棚しょつきとだなのまん中につきささりました。デフたちは、結婚式けっこんしきの真まっ最中さいちゆうでした。矢を見ると、引っこ抜こうとしましたが、ぬくことができません。

「この矢はとてもおれたちの手に負えない。もしこれほどの力で矢を射いたやつがここに来たらどうしよう」

デフたちは、ちりぢりになって逃にげて行きました。ただ、足の不自由ないっぱきのデフだけがそこに残のこって、暖炉だんろの中にかくれました。

りんごのうす切りたちは、すっかりしたくのできたテーブルについてよろこんで食べ始めました。三人は、しばらくそこで暮らすことにしました。そして、毎日ふたりは狩かりに出て、ひとりは留守番るすばんをして食事のしたくをすることに取り決きめました。

最初さいしょの日は、土くれを食う男が留守番をしました。食事の用意が整ととのうと、いきなり暖炉の中から足の不自由なデフはい出して来ていいいました。

「わしにワインを一杯いっぱいくんでくれ。そして食べ物をくれ」

土くれを食う男は、そのデフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ」

土くれを食う男は、また、デフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ」

土くれを食う男は、腹を立てていいました。

「いったいなんだ。繰り返し繰り返し『わしに一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ』とは。おれの用意したものをみんな食べてしまう気か」

「まあ一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ。さもないとおまえを飲みこんでしまうぞ」土くれを食う男は、びっくりして家から飛び出して逃げて行きました。デフはそこにすわって、食べ物をみんな食べてしまいました。

夕方、みんなは家に帰って来ましたが、お腹を空かせて寝なくてはなりませんでした。

つぎの日は、うさぎをつかまえる男が留守番をしました。食事の用意が整うと、暖炉から、あのデフが出て来ました。

「わしにワインを一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

うさぎをつかまえる男は、デフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

うさぎをつかまえる男は、また、デフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

うさぎをつかまえる男は、腹を立てていいました。

「いったいなんだ。おれの用意したものをみんな食べてしまう気か」

「まあ一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ。さもないとおまえを飲みこんでしまうぞ」
うさぎをつかまえる男は、びっくりして家から飛び出して逃げて行きました。デフはそこにすわって、食べ物をみんな食べてしまいました。

つぎの日は、りんごのうす切りの番でした。りんごのうす切りは、ごちそうをたつぷり用意して、仲間の帰りを待^まっていました。するととつせん、暖炉の中から足の不自由なデフがはい出してきていいました。

「わしにワインを一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

りんごのうす切りは、デフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

りんごのうす切りは、また、デフに一杯くんでやって、食べ物をやりました。デフはまたまたいいました。

「わしに一杯くんでくれ。そして食べ物くれ」

りんごのうす切りは、腹を立てていいました。

「いったいなんだ。繰り返し繰り返し『わしに一杯くんでくれ。そして食べ物くれ』とは。おれの用意したものをみんな食べてしまう気か」

「まあ一杯くんでくれ。そして食べ物をくれ。さもないとおまえを飲みこんでしまうぞ」
りんごのうす切りは、にやりと笑^わって、デフに向かつて矢を放ちました。デフはまっぶたつになってしまいました。デフの頭は一方の側^{がわ}へ転^{ころ}げ落ち、体はもう一方の側へ転^{ころ}げ落ちました。頭はさげびました。

「おれについてくる者は幸せになるぞ」

ところが、体はさけびました。

「おれについてくる者は、ひどい目にあうぞ」

そこへ、ふたりの仲間が帰って来ました。りんごのうす切りは、いいました。

「ご飯を食べたら、頭について行ってみよう。デフの頭がおれたちに約束する幸せってなんなのか見てみようじゃないか」

三人は、デフの頭について行きました。頭はどんどん転がって行って、深いあなに落ちて行きました。あなの中をのぞくと、あなの底に、美しい娘が三人すわっていました。お日さまのもとでだれもまだ見たことがないほど美しい娘たちでした。

「あの娘たちを連れ出して、おれたちの妻にしようじゃないか」

まず、土くれを食う男が、腰になわをまいてあなの中へ降りて行きました。りんごのうす切りとうさぎをつかまえる男が上でなわを持っていました。土くれを食う男は、中ほどまで行くと、さけび声をあげました。

「熱い。やけどしてしまう。引き上げてくれ！」

ふたりは男を引き上げました。

つぎに、うさぎをつかまえる男が降りて行きました。けれども、中ほどまで行くと、

「熱い。やけどしてしまう！引き上げてくれ！」とさけびました。

りんごのうす切りの番になりました。りんごのうす切りは、

「おれがいくら『やけどする』とさけんでも、どんどん下へ降りてくれ」といって、あなへ降りて行きました。中ほどまで行くと、りんごのうす切りは、

「熱い。やけどしてしまう！引き上げてくれ！」とさけびました。けれども仲間たちは耳をかさないで、どんどん深いところへ降りしました。

りんごのうす切りは、あなの底に着きました。そして、一番年上の娘を引き上げさせて、土くれを食う男に向かってさけびました。

「それは、おまえの妻だぞ」

それから、二番目の娘を引き上げさせると、うさぎをつかまえる男に向かって、

「それは、おまえの妻だ」とさけびました。

さて、三番目の一番美しい娘を引き上げさせようとすると、娘はいいました。

「だめです。まずあなたが引つ張り上げてもらいなさい。そうしないと、あなたの仲間

は、あなたを裏切^{うらぎ}って、あなたをひとりこのあなの中に取り残すでしょう」

けれども、りんごのうす切りは、

「いや、あなたが先だ」といいはりました。娘は、いいました。

「よろしい。でも、あなたの仲間^{うち}は、わたしを引き上げると、きつとすぐにこのあなを埋めてしまうでしょう。あなたは、ひとりでとり残されたら、よくあたりを見まわしてください。すると、泉^{いずみ}が三つあるのが見えるでしょう。ひとつは黒い泉で、もうひとつは青い泉、もうひとつは白い泉です。けれども、まちがえないでください。あなたは、頭を黒い水にも青い水にもつけてはいけません。白い水にだけつけるのです。そうしなければ、あなたはほろびてしまいます」

娘のいったとおりになりました。仲間たちは、娘を引き上げると、すぐにあなを埋めて、りんごのうす切りを置き去^{おきざ}りにしました。あたりを見まわすと、泉が三つありました。りんごのうす切りは、よく見もしないで、黒い泉に頭をつっこんでしまいました。そのとたん、りんごのうす切りは地下の王国に落ちて行きました。

あたりを見まわすと、小さな家が一軒見えました。行ってみると、ひとりのおばあさんがいました。

「おばあさん、どうか水をください」と、りんごのうす切りが頼^{たの}むと、おばあさんはいました。

「それがねえ、水は今ないのだよ。竜^{りゅう}が王さまの娘を手に入れるまで待たなきゃだめなんだ」

「竜だって？」

「竜が水を独りじめしていてね、わたしたちは、水が欲^ほしければ娘をひとりずつ竜にわたさないといけないんだ。王国の娘はみんな竜にとられてしまったので、こんどは王さまの娘の番なんだよ」

りんごのうす切りは、

「ぼくに水おけをください。水をとってきます」といいました。おばあさんは、止めましたが、りんごのうす切りは、耳をかさないで、水おけを持って水場^{みずば}へ行きました。

水場につくと、りっぱな衣装^{いしやう}を着た娘がすわって泣いていました。りんごのうす切りは、

「あなたは王さまのお姫^{ひめ}さまですね。あなたを助けに来ました。でも、今は眠くてたま

らない。きみは見張っていて、竜が来たら起こしてくれないか」といいました。そして、娘のひざに頭をのせて眠りこみました。

そこへ、竜があらわれました。娘は、りんごのうす切りを起こすこともできずに泣くばかりです。すると、その涙が、りんごのうす切りのほつたにぽとんと落ちました。りんごのうす切りは、目をさまして、竜を見ると、飛びあがって矢を放ちました。竜はまっふたつになりました。

お姫さまが無事にお城にもどると、王さまは大よろこびしました。そして、りんごのうす切りに、

「あなたを姫と結婚させ、王国の半分をあたえよう」といいました。

「いいえ、わたしを上の世界へつれて行っていただければ、ほかに何もいりません」と、りんごのうす切りは答えました。けれども、王さまは、りんごのうす切りを上の世界へつれて行く方法を知りませんでした。

りんごのうす切りは、王さまに別れをつけて歩いて行きました。どんどん行くと、高い木の上にパシクンジの巣がありました。巣にはパシクンジのひながいて、泣きわめいていました。見ると、巣の上を竜が輪を描いて飛んでいました。りんごのうす切りは、すぐさま矢を放ちました。竜はまっふたつになりました。そこへ、母親のパシクンジが飛んでもどって来ました。ひなたちは、母親に、

「この人がわたしたちを救ってくださいました」といいました。母親のパシクンジは、りんごのうす切りに、

「お礼に何でも好きな物をさしあげましょう」といいました。

「ぼくを上の世界へつれて行ってほしいんだ。ほかに何もいらないよ」と、りんごのうす切りは答えました。パシクンジは、

「それはむずかしいことだけど、なんとかできるでしょう」といって、肉をどっさり用意するようにいいました。

りんごのうす切りは、王さまのお城にもどって行って、旅の用意に肉をどっさりほしといいました。王さまは、よろこんで、必要な物をみんなくれました。

いよいよ、パシクンジが、りんごのうす切りを肩に乗せて飛び立ちました。

パシクンジが口笛を吹いて後ろをふり向くと、りんごのうす切りが肉をひと切れくちばしに入れてやりました。そうやって、パシクンジは何度も肉をくちばしに入れて

もらいながら飛びつづけました。

もうじき上の世界に届く所まで来たとき、パシクンジが最後の口笛を吹きました。ところが、りんごのうす切りは、肉をぜんぶやってしまつて、手元にも残っていませんでした。そこで、自分の足の肉を切り取つて、パシクンジのくちばしに入れてやりました。パシクンジは、それがとてもおいしかったので、のみこまないで舌の下にとつておきました。

ようやく上の世界に着きました。

「さあ、肩から下りて、この道をどんどん行きなさい」と、パシクンジはいいました。りんごのうす切りはお礼をいって歩きだしました。ところが、パシクンジは、りんごのうす切りが、片足を引かずつて歩いているのを見て、

「いったい、どうしたんです」とききました。そして、最後の肉がりんごのうす切りの足の肉だったことを知ると、すぐに、口の中から肉を取り出して、りんごのうす切りの足のもとの所にくつつけました。そして、飛び去りました。

りんごのうす切りは、どんどん歩いて行きました。

長いこと歩いたのだろうか、わずかしかなかったのだろうか。しまいに、ある村に着きました。そこでは、土くれを食う男と、うさぎをつかまえる男が、あの美しい娘たちと結婚しようとしていました。りんごのうす切りは、弓を引きしぼっていいました。

「雌牛を射ようか、雄牛を射ようか」

すると、末の娘が答えました。

「雌牛に罪はありません！」

りんごのうす切りは、ふたりの男めがけて矢を放ちました。

それから、りんごのうす切りは娘たちを連れて故郷に帰りました。りんごのうす切りは末の娘と結婚し、上のふたりの娘は、りんごのうす切りの兄さんたちと結婚しました。

村上郁再話

資料『世界の民話20 コーカサス』小沢俊夫編訳／ぎょうせい